

- 6月20日に県内の先進的な活動組織、村山地域14、置賜地域8の市町、関係団体で開催。
- 宮津助教の講演後、令和4年度の成果、令和5年度の事業内容について説明した。

「山形県内外の田んぼダムの効果評価事例」

講師：新潟大学農学部 助教 宮津 進 氏

- 宮城県大崎市と山形県中山町での氾濫シミュレーション結果をもとに、流域面積と水田面積の割合による効果検証結果の違いについて紹介。
- 田んぼダムに取組むことにより、排水機場の運転時間を減らすことができる事例の紹介。



意見交換（主なもの）

田んぼダムの効果を簡単に理解できる活動が必要

- 組織の活動で説明する際、資料では理解してもらえないという悩みがある。動画などで田んぼダムの取組みの効果の比較があれば伝わりやすい。
- 集落にのぼり旗を設置して、観光客や集落の方々に実際に見てもらおう啓発活動をしている。
- 組織の職員が事務処理を行い、農家の方は現場に注力できるという体制をとっている。協力をしやすい組織体制が普及には必要である。
- これまでの取組みで、農家へのインセンティブの重要性を実感している。農家にメリットのある支援を進めたい。
- 先進地での活動を勉強して、農地整備事業に取組んだことにより活動が進んだ。

- 農家にとってメリットが薄いけども、下流の住民には非常に大切な施設となる、それをいかに農家に理解してもらおうかが重要であり、流域治水という観点から県民運動となるように広報していく必要がある。
- 田んぼダムで誤解されやすいポイントを理解してもらうことが必要。取組み者は利益がないとの話もあるが、身近な所から効果が発揮される。
- 10年に1回の大雨のときに、田んぼダムの調整装置が継続して設置されている必要があり、ソフト面の対策は活動を継続していく上で重要。そのためにインセンティブを形成することは極めて重要である。
- 流域治水を進める観点から、河川行政サイドからの支援も必要。